

「座談会」

中京大学社会科学研究所三〇周年記念

「所長との座談会」

日時 二〇一〇年七月二十四日(土)

場所 旧一号館 社会科学研究所

司会 佐道明広

参加者 石堂功卓

呉世煌

安村仁志

檜山幸夫

酒井恵美子

ペトリシエヴァ・ニーナ

檜山

きょうは、お暑い中、しかも猛暑の中をお集まりいただき、どうもありがとうございます。

実は三〇周年ということので、ニーナさんのアイデアで、「せつかく三〇周年なので何かやるべきだ」ということ

になりました。何か実りのあるものでやろうということであれば社会科学研究所に関する記録を残すことが重要ではないだろうかということで、企画委員長の佐道さんが中心になりまして、計画をしていただきました。今日はその記録の会を催させていただきたいと思います。

特に総合社研を作って、そしてこの社研まで来た、その経緯はぜひ記録をしていくべきだろうというふうに思いまして、まずそこを第一番目に、後は呉さんに台湾を含めてお話をいただくことにしたいと思います。それから、安村さんには社会人講座の話も含めて、お話しいただきたいと思います。今日は、特に社研の前半期を中心に記録をしていきたいというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

では、佐道さん。

司会（佐道）

もうほとんど司会が言うことがなくなってしまうって、今さら私が言うことは何もありませんけれども、今、檜山現所長からお話がありましたとおり、社研設立の経緯を記録に残したいということです。

新しい学部ができ、所員の数も増えてきておりますが、これまでの社研の活動ということについては、私も含めてですけれども、新しく来た者はあまりわかっておりませんが、これまでのいろいろな苦労があってそして今の社研があるということだと思いますので、ぜひそのところを教えてくださいたいということでございます。

社研が正式にできたのが一九八〇年の四月ということなんですけれども、その前が総合社研ということだったと聞いております。そもそも総合社研というのはいったいどのようなものだったのかとかどのような活動をしていたのかとか、それから総合社研から独立をして社会科学研究所というのが発足をする経緯をまず教えてくださいたいと思います。石堂先生。

石堂

そうですね。僕は資料をきちんと手元に寄せてフォローしておけばよかったんですけども、そういう暇がなく自分の記憶だけに頼りながら話してよろしいですか。

司会(佐道)

はい、結構です。

石堂

私の記憶では、昭和四三年、一九六八年に自主的研究団体ということで、五、六人の方の発案で集まったわけです。もう亡くなった方がほとんどですけれども、青木秀夫先生とかそれから関口先生という方がおられました。関口先生は旧満鉄の調査部にいた方でなかなかおできになる方でした。それから、澤登佳人という、この人は刑法、刑事訴訟法の専門家で新潟大学に行かれましたけれども、今まだご存命だと思います。その方とか、それから我々は助教クラスで参加しました。最初は七、八人だったでしょうか。それで始まったわけです。

自主研究団体に始まって、名前をどういう研究団体にするかということで、いろいろ意見が出ました。「社会科学を勉強するのだから社会科学研究所でいいじゃないか」というふうなことを、僕は東大の研究者もやらせてもらったりして東大の社研にあこがれていたものですから、そういうふうな意見を出したらしかられました。「そのような古い社研のイメージはだめだ、新しい時代に新しく社会科学をやるのだから、それを総合するというふうな意味がなければだめだ」というので、そこで「総合社会科学研究所」という研究団体にしようということになりました。自主的な研究団体ですから、大学の付置でもありませんし、学部の付置でもない、そういう自主的な研究団体としての「総合社会科学研究所」というのができたわけです。やはり所長を置かなければいけないだろうということ

で、旧満鉄の調査部で随分活躍していらっしやって、東大の経済学部へ行った方で関口という先生……

安村

関口猛夫先生。

石堂

関口猛夫先生ですね、その方がいいんじゃないかというふうなことで、その方を所長に仰いで、そして始まったのが「テーマ討論」でした。

テーマ討論というのは、テーマを決めて皆で討論をするというものでしたが、まず、どういうテーマを自主的研究団体に勉強していったらいいかということ話し合いました。当時、「南北問題」でありますとかそれから「東西問題」でありますとか、いろいろなテーマが出ました。それでもなかなかそのテーマがうまく決まらなくて、とりあえずアメリカ研究課題からやるうかというふうな話になって、お隣の南山大学の先生で学長をやられた方だったでしょうか、そういう先生も呼んだりしてアメリカ研究を始めたわけです。それで、アメリカ研究をやりながら東西問題も含めて勉強しようというふうなことでした。

一九六八年から一二年ぐらい続きましたか。研究会も月一回開いて、レポーターを決めてやっていったわけです。総合社研の雑誌も、僕の記憶では六号まで出したんですか……

安村

六号です。

石堂

確か六号まで。僕は若いほうだったものですからいろいろな仕事をやらされまして、それで六号まで出してやっ

たわけです。

そうしたらそのうちに、「せっかくこうやって研究所として研究活動をやっているんだから、大学付置の研究所にしてはどうか」というふうな話が出ました。それで大学付置研究所にすべく、全学的な研究所設置検討委員会という事で、各学部から二名ずつ出まして、たまたま私がその議長をさせられまして、書記を佐保雅子先生という方がなさっていてまして、その検討が始まったわけです。

初めての大学付置研究所を作りますので、各セクションからの論客の方もいましたし、それでいろいろな角度から検討して、財政的な問題もあれば、スタッフの問題もあるし、それから各学部のスタッフと研究所のスタッフをどういふふうに位置付けるかというふうな問題もあって、なかなか議論が錯綜しまして、結局大学付置研究所の検討委員会での検討が二年ぐらいいかりました。

司会 (佐道)

社研は八〇年にできるわけですけども、七八年ぐらいに、社研ができる二年ぐらい前からその検討委員会ができたということですか。

石堂

そうですね。その検討委員会は非常に熱心に開かれたのですが、議論百出で、とりわけ僕がチエアマンですから、みんなの意見を集約しないといけないのですけれども、だんだん為にする議論が多いような気もして、とりわけ教養部出身のある先生などは論客で、「総合社会科学とは何ぞや」とかそのようなことまでおっしゃって、「社会科学だったら分かるけれども、総合社会科学とは何ぞや」と、そのようなことを言われて、なかなか皆さんの意見がまとまらないわけです。僕は、「それだったらもうこの検討委員会、やめにしましょうか」と言ったこともあったの

ですけれども、そうしたら書記の佐保先生が、「いやあそんな、先生がそのようなことを言ったら研究所なんかできっこないではないですか」というふうなことをおっしゃいました。文学部の加藤等という先生がいらっしやいまして、その先生が年配でもあったものだから、「石堂さん、そつ短気を起こさずに、もう少しみんなでじっくり検討しようではないか」とおっしゃったので、みんなが意見が固まったところで発足すればいいわけだからということでまた議論を続けました。それでようやく二年ぐらいかかって一九八〇年に正式に中京大学の初めての大学付属研究所ということで発足したわけです。

司会（佐道）

社研は二年間かなり厳しい検討会議の結果生まれたということをつかっていたのですが、その前に総合社研の様子についてちょっとおうかがいしておきたいと思います。最初は五、六人といいますが、少人数で集まったということだったので、これは学部横断的ということですか。

石堂

横断的でした。

司会（佐道）

では、複数の学部の先生方ということですか。

石堂

そうですね。商学部と法学部と、当時は経済学部はまだなかったわけだね。

複数

ない。

石堂

ないですね。

呉

文学部、法学部、商学部、体育学部でした。

石堂

そうですね、文学部と法学部と商学部と体育学部と、この四つでしたね。

一九八〇年に今の総長が学長になって初めて私大協会から私大連盟に変わって学部増を始めましたから、四学部あったと思いますね。その四学部から二、三名ずつぐらい出て始まったわけです。

司会(佐道)

すみません。大変失礼な質問なのですが、ここにいらっしゃる四人の所長経験者といいますが、現所長も含めて皆さん、総合社研時代を経験しておられるんですか。

檜山

僕は経験してない。

安村

僕は総合社研、経験してる。

石堂

いや。総合社研が始まったときは同じで、ちょっと遅れて呉先生が入ってこられています。

安村

僕が七四年にここに来たのです。

檜山

ああ、そうか。安村先生は。

司会（佐道）

では、安村先生は総合社研の時代をご存じだということですか。

安村

知っています、知っています。図書館の会議室でテーマ討論したことがありますよ。

石堂

そうそう。テーマ討論、大変でしたね。

司会（佐道）

今、お話が出ましたけれども、先ほどのテーマ討論、大学の付置研究所ではないということですから、大学側から公的なサポートは得られていないというような立場ということですね。

石堂

はい、そうですね。

呉

経費はすべてスタッフです。

司会（佐道）

ですから、場所の確保とかいろいろなことでも大変苦労されたのではないかと思うのですけれども、そのへんは

どうですか。

石堂

そうですね、ええ。だから今、出ましたように、図書館の会議室を使って集まっては研究をやっていました。

呉

私は一年後に入ったのですが、私の記憶ですと結構人数も多くて、何か活力がすごかったですね。

石堂

うーん、そうそう。

呉

そのとき、既に人数が多くてもうディスカッションもけんけんがくがくで、本当にあのときは燃えていたわけです。

石堂

呉さんが入ってこられて本当に一年の差ですけども、バアツと増えてしまったですね。

司会(佐道)

最初は五、六名といいますが、少人数だったのが、翌年ぐらにはかなり増えてきたということですか。

石堂

そうですね。そういう人たちが集まって学部横断的に始めようというのがバアツと広がってしまったものですから。

司会(佐道)

これは規約とかそういうものも作られて活動されたのですか。

石堂

総合社研のときですか。

安村

厳しい規約だったけど。

石堂

本当に厳しいですよ。

安村

厳しい規約。

石堂

研究会に無断欠席したら、「クビだ」とか（爆笑）。

酒井

そんなのがあったのですか。

石堂

本当に。そこに総合社研の規約ありませんか。

安村

総合社研の規約はおそらく。

呉

どこかに載ってるよ。

安村

『中京社研』という雑誌が残ってますから、それを見れば、はい。

石堂

その後ろ。

司会(佐道)

新しいやつですか。

呉

あれは二十周年のときの、あそこかなり詳しく話が載ってます。

司会(佐道)

ああ、そうですね。

石堂

六号がきちんと残っているはずですよ。

司会(佐道)

その雑誌なのですけれども、つまり大学のサポートがないということは予算の問題とかもすごいあったと思うのですが、それはどうやって出されたのでしょうか。

石堂

費用はどうやって出しましたか。

呉

僕の覚えだけど、雑誌だけはお金もらったと思います。

石堂

もらったかね。

呉

さもないと出せないですよ。

司会（佐道）

ですよ。かなりの金額になると思いますから。

呉

そうそつ。

石堂

青木さんという方が事務局次長でもありましたから、あの方がうまく予算を工面して雑誌を出したのではないでしようか。大学の決まった予算でうんぬんということはなかったですね。

司会（佐道）

では、大学の中からまた何らかの形でのお金を持ってきてその雑誌の発行に当てていた。

石堂

そうですね。

司会（佐道）

六号ということですからねども、それは総合社研が始まってしばらくしてから雑誌を出し始めたということですか。

石堂

そうですね。

安村

二年後。

呉

十二年の間に六冊で。

司会(佐道)

六冊、毎年ということでは、ないんでしょうか。

石堂

いや、違います。テーマ討論とか研究会とかが重なって行って、ある程度業績らしきものが出てもいいような雰囲気になったときに、原稿を集めて出しましょうというふうだったです。

安村

ここにある記録によると、昭和四三年に始まって創刊号が出たのが四六年。

司会(佐道)

四六年。でも、もう三年後ですから、相当最初から活発な活動が行われていたわけですね。

石堂

そうですね、ええ。

呉

活発でしたよ。

石堂

本当に皆さん意欲に燃えてましたね。

呉

燃えてました。

司会（佐道）

研究会とかは図書館の一室を使用されていたということですけども、ということとは常設の事務所というのはないわけですね。

石堂

常設の事務所はなかったのではないかと思いますね。

司会（佐道）

連絡とかは。

石堂

連絡は全部、幹事になっている人がやりました。

司会（佐道）

研究室で受けて連絡をされていた。

石堂

そうですね、連絡をしていたんですね。

安村

僕が初めて来たときは、アルバイトの学生さんがいましたよね。

石堂

はあはあ。

檜山

どこに、どこに。

安村

だから、だれか先生の研究室です。

檜山

研究室に。

呉

あれは私の研究室でやっていたわけです。

司会(佐道)

そうですね。

呉

ええ。

安村

研究室に、ゼミの生徒さんか知らないけれども、アルバイトの人がいて連絡しておられたということなんです。

石堂

通知の事務などで、僕のゼミにいた子で、そういうのを手伝わせたりして、ずっとやってましたね。

司会（佐道）

下世話な話であれですけども、アルバイトを雇うのにもお金がかかりますよね。

石堂

はいはい。

司会（佐道）

それは先生方が例えば会費みたいなものを出されたりとかそういうことですか。

石堂

いくらか皆さんで出し合っていました。

司会（佐道）

本当に、学部横断的に研究というものをこぎやって積極的にやっていたのだということが集まってこられたんですね。

石堂

ええ、そうです。当時、そう言うてはいけませんけれども、アカデミックな雰囲気がこの大学になかったわけです。僕も正直言つて、まあ僕は東京の大手の大学にいたものですから、来てびっくりしました。キャンパスの中をトレパンを履いた体育学部の学生たちが走っているわけですね。そういうのを目の前にして、これで大学なのかなと思ったりしまして、そういう気持ちがあったものだから学部横断的に自主的研究団体を作ろうというときにはも

のすぐくうれしくて、そういう気持ちを持っている若い先生が、教授の先生といっても若い先生ですから、いま考
えると皆さん厳しい規約を作って、研究会を無断で欠席したら除名するとか、そのような大変なものでした。

司会(佐道)

厳しいですね。新選組のような。

石堂

そうそう、プレッシャーをかけられていましたね。

司会(佐道)

それだけやる気のある方々がお集まりになってそういうふう活動されていたんですね。

石堂

そうですね。

司会(佐道)

テーマは、最初はアメリカ研究から入られて、そして東西問題とかそういうことも研究をされていたと思う
ですけれども。

石堂

そうですね。六冊の『中京社研』にまとめました。

安村

ありますよ、僕はうちに。

司会(佐道)

じゃあそれを、座談会のところの囲みか何かでそういうものもまた入れられるといいかと。

石堂

それを持ってきてもらうとしゃべりやすいのですけれども。

安村

第三号座談会、「公害問題と現代社会」。

石堂

公害問題もやりましたね。僕も論文を書かされましたよ。

呉

松本昌悦先生も環境問題だね。

石堂

環境問題、やってました。

安村

第四号、「現代における対立と総合」。

第五号、「自由社会の命運」。

第六号、「法と社会」。

檜山

すこいじゃないですか。

石堂

いや、本当にすごいテーマですよ。テーマ討論でもすごかったですからね、白熱した議論でね、いろいろな立場の方がいらっしやるでしょう。

司会(佐道)

今から見てもテーマとしては全然古くなっていないテーマなんですよね。

安村

政治学の宮沢健先生がおられて

石堂

ああ、亡くなったけれどもねえ、宮沢……。

安村

亡くなられました。

石堂

そうですね。

安村

その先生なんかがそういう……。

石堂

宮沢先生も論客でしたね。

安村

対立とか総合とかやっておられましたけれども。

石堂

そうですね。

司会（佐道）

そういう研究活動がバツクになって、正式な付置研究所にすべきだという議論が盛り上がってきた。

石堂

すみません。

酒井

これが雑誌の創刊ですね。

石堂

ああ、創刊ですね、はいはい。

檜山

付置研究所の議論になんて六年かかったの。

司会（佐道）

二年。

呉

二年。

石堂

二年ですね。

檜山

ああ、スタートしてから二年ということは、一〇年やったということですか。

呉

一〇年だね。

檜山

なんで一〇年もかかったんですかね。それだけ盛り上がっていて。

石堂

やはり活字にするのには慎重だったということではないでしょうか。なんせ議論をよくしましたよ。だから、この『中京社研』の創刊号でも、総合社研の生い立ちということで皆さんが座談会をやっているのですけれども、いろいろなことを言っています。

司会(佐道)

総合社研の生い立ちという座談会があるのですか。

石堂

はい。生い立ちでしゃべっているのは青木秀夫という商学部の先生、それから澤登佳人という法学部の先生、それから加藤等さんというのは文学部の心理の先生です。それから、法学部の松本昌悦、それと商学部の西郷幸盛、それと商学部に野口英司先生というのがいましたね。それから、私と早稲田に帰った坂本圭右というのもしましたね。このあたりで八人です。八人が総合社研の生い立ちということで座談会をしています。

呉

一号ね。

石堂

そう創刊号です。

石堂

思いの丈をしゃべっているわけです。

司会（佐道）

付置研究所の検討委員会で議論されたのが大体二年間ぐらいだということだったと思うんですけども。

石堂

ええ、そうです。

司会（佐道）

この検討委員会を作る前にもこういふ付置研究所にしたいという、そういう要望があったからこういふのができたということになりますかね。

石堂

それはそうですね。だけれども、非常に民主的にやらないといけないということなんです。それで、学部横断的な自主的研究団体なものですから、だれかが理事長とボス交でボンと作るようなものではない、きちんとした大学付置研究所にしないといけない。そのためには組織もきちんとしないといけないということで全学協議会というところで議論しました。

安村

今も、あります。

石堂

全学協議会に提案しまして、それで各字部の機関から二名ずつ検討委員を出していただいて、それでやりました。当時、学部が四つぐらいでしたか、それに教養部と五つぐらいで、一〇人ぐらいですね。けれども、本当に議論が錯綜するわけです。

司会(佐道)

それはやはり積極的な方と、そうでもない方ということになるのでしょうか。言い方は難しいですけど。

石堂

最初の大学付置研究所ですから、やはり作ろうとする人たちは本当に早く作ってほしいわけです。ところが、それを作らせたくないという気持ちを持っている人もいるわけです。それが、ためにする議論をやるわけです。つまり、総合社研とは何ぞやというような議論になると、これは延々と続くわけです。

司会(佐道)

ちょっと単純な話として、やりたいという方が例えば付置研究所になつたらなつたで、所員として参加をされるわけです。やりたくなければ参加しなればいいだけの話ではないかと思うのですけれども。

石堂

それがやはり大学付置研究所ですから、初めての大学付置研究所ができるかできないかというのは、皆さん大変関心を持っていらつしやる。

呉

これは協議会の性格をちよつと知らないといけないわけです。中京大学の協議会というのはものすごく何か民主主義的で、非常に困るシステムになつてきているわけです。要するに、すべての学部、すべての研究者が賛成しないと議題は通らないというシステム、それが今でも民主的なわけです。やはり当時は少しね、というようにバタバタとこつこつにやつたときがあるから、気に入らなければちよつと反対しようかみたいところがあつたりなんかして。

石堂

正直言つて当時の理事長、先代の梅村清明先生ですけれども、個人的には親しかつたものだから、いろいろなことを話すわけです。大学付置研究所にしたいと思つてますよ、総合社研として関口先生を中心にしてということをお話をしたら、それはいいですよ、もうどんどんやつてくださいよと言われながら、あまりにも長くかかるでしょう、一年経つてもまだまとまらなかつたわけです。だから、そのうち今度はしびれを切らされて、大学には付置研究所が一つぐらいないといけないというので、先代の梅村清明先生が、商学部が発足後二〇年経つたら、普通二〇歳になれば大人なんだから、二〇年経つたところで付置研究所ぐらい作つてもいいのではないかという理由から、商学部の付置研究所を作ろうとすめられたわけです。それが後の「中小企業研究所」です。それを商学部の二〇年の記念事業として研究所を作ろうとしたわけです。それで、検討委員会のメンバーにしたら、いま一生懸命やつているのにそれをボンと作られたのではちよつと順序がおかしいのではないかというので、また議論が少し進み出したわけです。だから二年目の最後のころはかなり強い反対をしていらつした方も、ある程度総合社研ではなくて社会科学だつたら、従来の概念としてきちんとあるのだろう、社会科学研究所ならば認めてもいいですよということをお願い始めて、それで結局僕が最初に言つていた社会科学研究所という名称になつてしまつたわけです。本

当はその当時の人たちは、新しいことをやるのだから、新しい総合社会科学研究所というのを作りたかった。そしてたどこにもない研究所ですし、それから中京大学の最初の付置研究所としては名称も「総合社会科学研究所」でいいのではないかとということだったのですけれども、そういう反対もあっているいろいろな検討した結果、社会科学研究所という名称に戻って、それで発足するということになるわけです。

司会(佐道)

その先代理事長の言われた「中小企業研究所」ですが、それは商学部の学部付置という形で発足をされたわけですか。

石堂

はい、そうです。つまり、商学部の二〇年の記念事業として作ればいいのではないか、そうすると学部付置の研究所が先にできてしまうわけでしょう。それで、二年近くかけて一生懸命検討委員会が検討しているのに、それがポンと協議会に提案されて承認されるというのは順序がおかしいのではないかということになって、それで最後は収斂してしまいましたね。ある学部の先生なども社会科学研究所なら認めてもいいですよということなので、それでまとまって協議会に提案するという形です。

司会(佐道)

「中小企業研究所」、今の「企業研究所」ですね。

石堂

はい。

司会(佐道)

今、大学付置研究所としてやっていますけれども。

石堂

そう今は、大学付置研究所になっていますよね、ええ。

司会（佐道）

一応学部付置でできるのはできたわけですか。

石堂

そうですね、最初は学部付置でした。それは、商学部の発足二〇周年を記念しての記念事業でして、だから全学的な検討委員会などは作らなかつたです。というのは学部付置だから、学部の問題としてできるといふことですね。

檜山

そうですね。

石堂

そこらあたり僕らはものすごく矛盾というか、違和感を感じましたけれども、しかしそれはやはり人間の集まりだから、いろいろな考え方がいらっしやるのでね。

司会（佐道）

研究所設立にご理解があつたようで、しかしちょっと方向が違つたのではないかといふことだと思つのですけれども、最初の大学付置研究所として社研が創立するということについての先代の理事長はどついつ反応だつたのでしょうか。

石堂

それは大賛成、大学には研究所、大学付置の研究所がないとおかしい、それが一つもないというのは大学としての体面上よくない。だから大いに作ってほしいと、こういふふうだったので。

司会(佐道)

では、できた後に何かあるということはないわけ……。

石堂

それはもう、できたら予算もつくし、非常にスムーズだったですね。

安村

でも、できてからも、全学から委員が出てきて、ここの研究所のメンバー以外の人が。

司会(佐道)

牽制というか。

安村

牽制というか、全体で運営をチェックするというか、そういうシステムになっているわけです。ですから、普通だったら研究所の中でいろいろなことを決めて運営すればいいのだけれども、それを必ず運営委員会に全学から委員が出てくることにかけていました。

石堂

そうですね。

司会(佐道)

全学の代表が出た運営委員会ですか。

呉

各学部一人選出されて、委員会を構成している。

安村

そこでもんでいただくというか、そういうシステムです。

呉

予算も含めてだったね。

安村

そうそう。それはそういう流れの続きとしてね。

司会（佐道）

はあ。

安村

だから、作ることにいろいろ意見のある人もいた中でできたから、できた後もそういうふうに様子を見るという、そういう体制になっておったわけです。ですから、何にしても三回ぐらい会議をしないと決まらなかったですよね。

石堂

そうそう。

安村

まず内輪で決めるでしょう。それから、所員会議みたいなので決めたとしても、まだその運営委員会で承認を得る。今でもある意味で付置研究所委員会がそういう機能を果たしていますけれども、もうあまりそういうことはな

いでしょう。でもその時はそういう感じだったです。

司会(佐道)

話は跳びますけれども、そういう体制が改まったのはいつぐらいからですか。

安村

それはやはり、いくつかの研究所ができてきてからです。

呉

その後に、いろいろな研究所が、雨後のタケノコみたいにできてしまったのです。

檜山

まず体育研究所が付置研究所として、それでその次に作られたのが文化科学研究所だったでしょうか。

安村

そうそう、文化研。

檜山

文化研は教養部が作られたのですよね。

石堂

教養部を中心としてね。

司会(佐道)

教養部の付置研究所ですか。

石堂

いやいや。

安村

違います

檜山

違うの、あれは全学ではないですよ、最初は。

呉

あれは全学です。

檜山

最初は全学ではないでしょう。

呉

あれは、実はモデルが社研なのです。だから、その規定の基礎を作るときに私もちょっと実はタッチしているのですよね。

檜山

あれは最初から全学なの。

呉

全学でやっている。

安村

だから、そうなって四つぐらいになったら、言い方は悪いけれども、だんだんじゃまくさいという。

呉

うちもそうなってしまったからね。

檜山

各研究所に委員会を作ったら。

安村

もしやったら大変なことになる。

石堂

えらいことだね。

司会(佐道)

そうですね。

安村

それでだんだん規約が変わったりしてね。

檜山

体育研究所の運営委員ってだれだった。

安村

それは、最初は木村先生とかでは、違いましたか。

檜山

違う違う、だって豊田に行って会議なんかやらないでしょう。

安村

だからやはり。

檜山

だから、あれができたときにはもう全学の委員会に変わっているのではないの。

石堂

体育研究所を作るのは木村吉次先生が中心になってですよ。

安村

ね、木村吉次先生ですよ。

石堂

社研を見習って。

安村

大体規約も全部コピーです。

檜山

だから、規約もそうですよね。

呉

すごく似ているんだよね。

安村

コピーです。言い方は悪いけれども、やはり文化研が研究所になったころから変わってきたのです。文化研は文

化研で集まる人が出てきて。

呉

だからね、私がタッチしたということは、頼まれてこれを見てくれと言われたのです。僕はいちゃもんをつけたのです。これはあまりきつくやると、文化研自体やりにくくなるからね。だから、今社研でこういうところで困っているから、なるべくこれははずせと言ってははずしたのです。

司会(佐道)

ストリートにお聞きすると、社研ができたけれども、社研にはなかなかメンバー的にそこに入るのはどうかと思っておられる方々が、別に文化研というのをお作りになったという、そういうことですか。

呉

そうです。

檜山

そういう傾向があるけれども。

安村

そういう傾向がある。

呉

多少はあるかも分からないですけどもね。

石堂

多少はある。だけれども、研究テーマが全く違いますからね。

司会（佐道）

最初、全学の運営委員があつて、運営委員会があつてという、非常に自主的な研究所の運営がやりにくいシステムで設立されたということですか。

石堂

そうですね。

司会（佐道）

初代の所長が学長の、もうお亡くなりになりました小山福松さんで、その次が今の総長・理事長の清弘さんですよね。

石堂

そうですね。

司会（佐道）

そういう、所長にそういう方がおなりになるというのは、やはりそういう全学的なことということも背景にあるということですか。

石堂

そうですね。僕は運営委員長だったのですけれども、当時はそれはそういう人を据えないといろいろなところからいろいろなクレームが来る可能性があるわけです。だから本当にあちらを見たり、こちらを見たりしながら、初めての研究所をつまぐ軌道に乗せなければいけないということでした。

司会（佐道）

大変ですね。

石堂

大変ですよ、本当にその早期というのは、僕はつくづくそう思いましたね。本当に途中で僕は会議の席で、検討委員会解散しましょうかという言葉を言ったんです。もう腹が立ってきますからね。

呉

だから、個別的なところで、石堂先生が怒っちゃって、尻をまくるという場面もありましたよね。

司会(佐道)

なかなか議論に議論をしてくると、論理的な話ばかりにはならないということにもなりますからね。

石堂

そうですね。

司会(佐道)

八〇年にできて、そういうふうに変なご苦労をされながら、そしてできた後もいろいろなかなか大変な状況を抱えながら滑り出しをされたということだと思つのですけれども、研究所としてはもちろんきちんと研究会を毎年やっておられて、着々と研究活動をやっておられるわけです。非常にユニークな活動として、例えば市民講座です。ロシア語の講座、それから一年遅れて中国語講座というのをやられている。これは九五年ですか、オープンカレッジができた後はそちらのほうにということになると思つのですけれども。

石堂

そうですね。

司会（佐道）

サービス事業としての市民講座、それから後の無料法律相談、こういったのがあるのですけれども、これはユニークな、外にも開かれた研究所として大変評価するべき活動ではないかと思えます。こういった活動をされるといのは、そしてロシア語から始めるとかいうことのいきさつとありますが、経緯とありますが、そこらへんをちょっと教えていただきたいのですが。

石堂

これは正直言いますと最初に大学院を解放して社会人講座を作ったのです。つまりアメリカなんかでは大学というものが、大学本来の研究機関だという意味ではなくて、地域社会に奉仕するという動きがある、日本でも象牙の塔にこもって、おれは大学人だと言っているようではいけないからというので、大学院の社会人講座を始めたのがきっかけなのです。それから、社研も社会科学研究所、大学付置研究所として初めてできたのだから、その研究所で何か地域社会に奉仕できるものはないだろうかというので話が始まりました。そうしたら、とりあえずボランティア精神にたけていらっしやる安村先生なんか、ロシア語の方たちからのお申し出が非常に多かったです。安村仁志先生、前川漸先生といったような方々がいらっしやって、ロシア語市民講座だったらすぐできますよというふうなことではじまりました。

司会（佐道）

安村先生、中京圏といいますか、この地域でロシア語の講座を開くこと自体が珍しかったのではないかと思うのですけれども、大変評判が高かったというふうに聞いておりますが、当時はいかがだったんですか。

安村

そうですね、今、石堂先生がおっしゃったように、大学が社会に何らかの形で貢献するということをこの社研の目的の一つに入れていましたから、その一つとしてまず市民講座をやるうと、または法律相談をやるうということになりました。では、市民講座といつても何をやるうかと考えたのです。それでロシア語からなぜ始めるかというところですが、それはさつきもちよつとありましたけれども、メンバーの中にロシア語あるいはソビエト法をやっておられた佐保先生もおられるということで、まず、そういう関係の者が何人かいたこと、それからやはり名古屋の中では一般に開かれる講座があるんですけどもロシア語は非常に少ないと、確か一つはあったのですけれども、そうではなくて大学がやるロシア語講座に来やすい人もおられるかもしれないからやってみようということとで始めました。ある種のニーズがあつたのかも分かりませんね。ですから、結構集まりましたし、その後中国語も同じような事情があつて、中国語もなかなかまだそのころは一般の講座が少ないということで、それで続いて開こうということ、これも中国語の吉村尚子先生という熱心な先生がおられたからやれました。そんな形で始まりましたが、受講者の統計がこれに載っていますけれども、だんだん人が増えてきたりして、クラスも初級・中級・応用というように分けました。一年が終わつたら何の資格もないのですけれども、一応所長が修了証というのをお配りするという、そういうことをしながらやってきました。

一番盛り上がったころは、ロシア語に関して言うと、やはりペレストロイカのころですね。超満員でした。大体それは夜ですから、まだ前川先生も若かつた、僕もまだ若かつたからできたような面があります。

石堂

そうですね。

安村

僕がよく覚えていますが、最初は法学部のほうで、一回目は法学部の教室でやったのです。

石堂

そうそう。

司会（佐道）

それは今の。

安村

あっちの法学部です。

石堂

今のね。

司会（佐道）

今の法学部ですか。

安村

そこしか場所がなかったから、そこでやったのです。そして、帰るときは興正寺のお墓の中を通過して帰らなくてはいけなかった。怖いです。

石堂

つまり、まず大学院で社会人講座をやったのです。それがきっかけでこちらのほうもやるつとということになったものだから、それであちらの校舎を使って、教室を使って始めたということですね。

安村

だから、最初は新聞なんかも来ましたよ。

司会(佐道)

ロシア語講座だけにとどまらず、ロシアとの交流といいますが、スポーツ関係者・観光団の訪問、大学から訪ソ団もだしたようですね。

安村

訪ソ団も行きました。

石堂

それはもうだいぶ後ですけどもね。その前にロシア語市民講座ができて通っていた小学生に福田愛子ちゃんという子がいました。それがゴルバチョフとレーガンの会談をテレビで見で、それでゴルバチョフを励ましてあげようかなと言いついて、手紙を出したのです。それでもつすごく話題になりました。ああいったこともロシア語講座の人気を高めたんじゃないですかね。

安村

それが一九八六年。

石堂

八六年ですかね。

檜山

八六年ね。

安村

だから、ちよつどペレストロイカが始まって。

司会（佐道）

ゴルバチョフが八五年からですから。

安村

アメリカでサマンサちゃんというのが先に手紙を送っていた。これは小学生だから、別にそれを意識していたわけではないけれども、ちよつと出してみようと先生に相談されて。

石堂

そう、いつも彼女は、六時半か六時でしたかね、始まるの。

安村

そうですね、六時ぐらいでしたね。

石堂

その前に来るんですよ。小学校六年生だからだめだったんです。そうしたらお父さんが、「では、女の子だからちゃんと送り迎えますから、入れてください」とおっしゃるものだから、皆さんに図って、ロシア語の先生も「では、送り迎えてもらうなら六時から八時までやりましょうか」ということに入ってもらったんです。その子がえらくなんでしょうか、こまじゃくれていたというか、早く来て一階のところでテレビを見るんです。テレビのニュースを見て、「あ、ゴルバチョフとレーガンが会談するんだ」とか言って、僕が「そうだよ、あなたロシア語習っているんだから、どちらを応援するの」と聞いたら、「ゴルバチョフ。ゴルバチョフを励ましてあげようかな」と言い出して、それで「だったらここで言うていてもしょうがないでしょう、手紙出さなきゃ」と言ったら、次の週に

ちゃんと手紙を書いてきたのです。しかも、クレムリンの絵と、アエロフロートの飛行機、あの絵を画いて、手紙と両方持って来ました。僕は一週間経つたら忘れてしまっているわけ。「先生、書いてきたよ」と言うから「えっ」と思つて。そうしたら、ちゃんと書いてあるので、これはやはり大事にしなければいけないかなと思ひました。それで日ソ協会を通じて、安村先生の力を借りて、ロシア語の文章を添えて出したんです。そうしたら、一〇月に出して一か月経つても二か月経つても何の返事もないから、ああやっぱりソ連つていふのは何をやるか分からん国なんだなあという気持ちになつて、僕もすっかり忘れていたら、一月三日になつていきなりソ連大使館からうちへ電話が入りました。かみさんが「あなた、ソ連大使館から電話ですよ」と。びっくりしてしまつて僕はソ連の悪口ばかり言つているから、狙われたかなと思つてドキドキしながら出たら、一等書記官の方が片言の日本語で「ソ連大使館ですけれども、愛子ちゃんが出された手紙がゴルバチョフのところへ渡つて、ゴルバチョフが感動してお礼のサモワールとお土産をちゃんと届けるからと言つたのです。それを大学にお持ちしたので、いつ行つたらいいかと、そういう話だったので。それから大騒ぎになつて、そうしたら内外のマスコミが八三社集まつてきました。先代の理事長も乗り気になつてしまつて、教養部のほうの大きな会議室、あそこへマスコミを全部集めて対応したのです。

安村

大会議室ね。

石堂

大会議室でやつたんです。

檜山

前川さんと安村さんと呉さんも並んでいる。

安村

これがそのときの写真です。だから、前川先生も写っているし、理事長も写っているし、石堂先生も写っている。

石堂

僕は横に座っているでしょう。

司会（佐道）

八七年の一月。

安村

八六年一月一〇日。

司会（佐道）

六年ですか。

檜山

一月一〇日、電話があつたのは一月三日。

石堂

一月三日です。

安村

子どもの手紙だから、大したことは書いてないですよ。ゴルバチョフ書記長さん、こんにちは。小学校六年生の福田愛子です。ロシア語を勉強しています。ゴルバチョフさんがジュネーブでレーガンさんと世界平和のために

話し合ったことは立派だと思えます。もうすぐクリスマスです。クリスマスプレゼントを待っています。お元気でと、それです。

司会(佐道)

子どもらしいですね。

安村

子どもらしい。だけど、どうやって出したらいいかも分からないわけです。

檜山

それはそうだね。

安村

住所も分からないわけです。

石堂

そうそう。

安村

ですから、「クレムリン」みたいにしておいたようなものです。だから、返事が来るとは思ってたんです。

石堂

いや、本当に。

安村

それはソ連側にいろいろなことがあったとは思いますが。

檜山

事情はあるわね。

呉

雪解けの時代だったから。

安村

そういうことになったのです。

石堂

あれは驚いたですね、本当に。

司会（佐道）

今どうされていますかね。

石堂

愛子ちゃんはあれですよ、その後今度、日ソ協会を通じて留学させてもらって、それでソ連の極東大学に留学して、そして四年間で無事に卒業して、今は通訳をやっています。僕は、日本の大学院のマスターだけちゃんと出ればロシア語の先生になれるからと言ってアドバイスしていたんですけども、やはり向こうから帰ってきて日本のマスターを出るのはどうも確率的に難しいという話で、結局小樽へとどまって、いま通訳をやっていますよ。もう家庭を持たれてね、子どもさんも二人。

安村

それでさっきのお話で、ほかに観光団が来るとかそういう話とのつながりでいうと、やはり先代の理事長が大学

を造る前、中京高校のころから、やはりいろいろな国の言語を含めたことをやっておかなければいけないと、そういうお考えで、中京大学ができた後すぐではなかったけれども、わりあい早い段階でいわゆる第二外国語にその当時としては珍しいけれども、ロシア語が設置された。それから、中京大学にはそのころ、体操の選手なんかがよく活躍していましたよね。今も体育学部に中山彰規先生とかそういう人がおられますが、そのときはソ連が片方の雄で、片方が日本でということでしたから、そういう交流もありましたし、それから総長・理事長がやはり体制は違つし、政治的な立場は違つけれども、隣の国だから仲良くしなければいけないという、そういうお考えだったので、ロシア語が盛んになっていきましたね。一時はものすごい数のロシア語学習者がいたのです。一、二年生、そのころは第二外国語は必修ですから、全部で八単位やるわけですが、一、二〇〇人から一、三〇〇人いたのではないですかね。

檜山

一学年で。

安村

二学年で。

呉

当時は、ロシア学科をつくれるとね。

安村

それは、数だけは日本で一番多いぐらいだったときがあったのです。そういうこともあって、理事長がソ連に行かれた時に、うちにはこれだけロシア語を勉強している学生がいるから、来年連れてくるとおっしゃって、では来

年行こうということ、ロシア旅行団ができたのです。

石堂

訪ソ団、そうです。

安村

だから、最初は梅村先生が団長で、そのほかの人、全部で三〇人くらい行きました。

檜山

そうだね。あれは社研でやったの。

安村

社研じゃないです。

石堂

社研も込みでやったね。

安村

あれは、総長の呼び掛けの下に、社研の人もそうだし、ロシア語の受講者なんかを誘って行きましょうと。

石堂

そうですね。

安村

それから何年ぐらいやったかな、ともかく九回ぐらい毎年やっていました。

檜山

うん、うん。

司会(佐道)

そうなんですか。

安村

夏休みになると。

司会(佐道)

何人ぐらいの。

安村

年によって違いますけれども、それでもそのころ珍しいから結構、一五〜一六人は常に行っていましたね。

檜山

ロシア語からの主催ではなかった。

安村

そうじゃないです。あれは一応、教養部のロシア語教室が募集してやったんです。

檜山

教養部のね。

石堂

最初行ったときは、理事長先生が日ソ協会の会長か何かもやっついていらっしやって。

呉

そうそう。

石堂

その関係で日ソ協会を通して人集めをしたりして、だから相当な人数でしたよ。

安村

チエルノヴィリの原発事故のときからやめてしまった。ちょっと怖くなつて。

石堂

チエルノヴィリね。

安村

そうそう、帰ってきて「髪が」抜けました」と言われたら困るし。

石堂

あのときもちゃんと人集めしていたんですね。

司会（佐道）

では、事故があったから中止ということでしたか。

安村

中止です。最初は、横浜から船に乗って行きましたよね。

石堂

そうだったね。

安村

定期航路です。

石堂

二日ばかりで。

檜山

横浜からね。

安村

横浜からナホトカ。

檜山

ウラジオストックまで行ったわけ。

安村

ウラジオはそのころは入れないから。

檜山

ナホトカへね。そういえばそうだね。

司会(佐道)

ちよつと話がずれるんですけども、さつき講座は法学部のほつの教室でやっておられたということなんですけれども、付置研究所になって研究所の事務所とありますが、それはどこにありましたか。

石堂

ここの一階、この建物の一階。

司会（佐道）

一階ですか。

石堂

はい。一階の小さな部屋を。

檜山

二階じゃないの。

安村

一階か二階か、それは数え方がもしかして。

酒井

ああ、そうですね。

石堂

一階だよ。階段を上がったすぐのところ。

檜山

あれは確かだね。

安村

書道室のところへんです。

檜山

あれは二階なの。

呉

階段を上がると二階なの。

檜山

一階は床屋があったり、一階はずらつとあつたでしょう。あれが一階。

石堂

それを言つとそつだね。二階かも分からないけれども。階段が上がつたところ、上がつてすぐ左側のところの小さい部屋です。

安村

そつそつ、今の書道のところですよ。

司会 (佐道)

我々はその時代を知らないもんですから。建物自体はこの建物と変わっているんですか、変わってないんですか。

石堂

変わってないです。

司会 (佐道)

中が改装されたんですか。

石堂

そつ、改装した。

酒井

入口がちょっと変わったんです。

司会（佐道）

そうなんですか。

檜山

ここは、四階はゼミ室か何かになっていましたよね。

石堂

うん、ゼミとかそれから書道の実習室とかそんながありました。

安村

宿舎もありましたね。

檜山

うん、こちらへんは宿舎だった。二部屋あった。

酒井

私の研究室がここにありました、一番最初は。

檜山

ここだったんだ。ここはともかく、二部屋あって、すごい大変だったんです。一泊五〇〇円で。

石堂

怖かったよね。

檜山

うん、あそこね、だれもいないだもん。窓を開けると墓石しか見えないだもんね。

司会(佐道)

こちらの年表の記録では、最初は別として語学の教室も研究所事務室と会議室で行ったと書いてありますね。

安村

そうそう。

石堂

はい、そうですね。

司会(佐道)

最初が法学部で。

安村

最初は法学部でやりましたけれども、その後はここでやっていました。

司会(佐道)

では、改装されてここに移ってきた、今のところになったのはいつぐらいなのですか。

安村

あれはいつごろかなあ、もう一五年ぐらいになるかな。

檜山

この場所。

安村

四階へ移ってきたのは。

檜山

四階へ。

石堂

もう一五年以上になるでしょう。もっとなるでしょう。

安村

ねえ。

檜山

四階だったか。

安村

大変だったですよ、移るの。

檜山

うん、移るの大変だったけど、一五年くらいになるか。結構長かったね。

石堂

長かったですね。

檜山

そっか、図書館を拡充したんだよな。

安村

うん。

石堂

随分広くなったね。

檜山

図書館自体がね。

司会(佐道)

ロシア語とそれから中国語ですけれども、中国語もやはり同じように、中国との交流とかがありましたか。

安村

中国との交流は。

呉

中国のほうは華々しくはやってなかったですね。

檜山

中国との交流はやってないでしょう。だけど、劇か何かやってなかった。中国語劇をやってなかった。

安村

それはね。

石堂

吉村先生ね。

安村

ロシア語が学生の団体を中心にロシア語劇をやることになって、初めは学生だけでやっていたのですけれども、「学生がこんなのをやりますから、講座の方、もしよかったら参加されませんか」と言ったり、「ぜひやりたい」という人が何人か出てきて、講座の人も出るようになった。中国語講座の方も何かそんなのをしたいということであるとき、ロシア語と中国語で合同で何かやったことがあります。

檜山

それはどこでやったんでしょう。

安村

それは学外でした。

檜山

学外でね。

安村

栄のなんとか教育文化会館とかなんか、そんなところでやりました。

檜山

そうだよな。

呉

あのときは、あの先生と一緒にやったの。うちの研究員の加藤紘捷先生という方がいまして。

檜山

ああ、加藤さんの奥さんだ。

安村

あの先生は熱心だった。一緒にやった。

檜山

加藤ダイアンさんね。

石堂

ダイアンさんですね。

安村

だから、ちょっと余談だけでも、そのロシア語講座にそのころ来ておられた方の一人が小塚光彦さんという人で。

呉

いたいた。

安村

その小塚さんのお孫さんが小塚崇彦君なのです。

司会 (佐道)

アイススケートの。

石堂

そうです。

安村

そのおじいさんもスケートの選手で、そのころ審判員をされていたのです。

呉

ああそつか。

安村

今度モスクワへ審判で行くけれども、ちょっと書いてくれと、そういうのをやっていた人なのです。そついつこともありました。

司会（佐道）

なかなか面白いですね。

呉

ロシア語をやられた方というのは結構年輩で、それはやる気十分でした。

安村

シベリア大学出身者みたいな人が多かったですよね。

石堂

うちの理事長もシベリア抑留されていますからね。それでいて日ソ協会の会長を引き受けたりするんだから。

安村

そついつの意味では、この号のどこかにあるんですけれども、特集を組んだことが三回あるんです、この紀要に。「戦争と平和の陰に」というシリーズだね。これは、先代の総長も含めて、戦争の時代を生き抜いてこられた方の貴重な体験を聞いておきましょつとつので、それこそこんな感じで聞いて、テープ起こししてやったのが三回あ

ります。

呉

三回、三冊。三冊出したんだよね。

安村

二冊が特別号、一冊は特集。あれは僕が今から考えても貴重なお話を聞けたなあと思いますよ。

呉

すごいよね。

安村

ソ連に行った人もいるし、中国で体験した人、それからオーストラリアで。

檜山

「潜入」(爆笑)だとか。

安村

そうそう。

檜山

いや、あれは面白いよ。

安村

あれはみんな読んだらいいと思いますね。

司会(佐道)

市民講座とかそれから無料法律相談というのもありましたでしょう。あれはどういうところからそういう発想されたのですか。

石堂

これもやはり、地域社会への貢献というか、せっかく専門家がちゃんとしているのに、社研の연구원として活躍しているのに、地域の市民の法律相談に応じたっていいじゃないかと、そういう地域社会への貢献という観点ですね。それで、弁護士会なんかにもそういう法律相談の機関はあるのだけれども、大学の法律相談というのはそういう実利的な問題でなくて、実際の生の事件を聞いて、そして院生たちと一緒に勉強してやっていこうと、そういう趣旨です。だから、弁護士会でやっている法律相談とはちよっと趣が違っていました。だから、すぐその場で相談を受けて応ずるのではなくて、全部話を聞いた上で院生にメモさせて、それを今度勉強して次の週とか次の月、そのときに解答する。そういうふうなシステムだったですね。

司会（佐道）

記録によりますと、刑法、労働法、公法、民法という四つの分野で、毎月第二・第四土曜日ごとに二分野ずつ相談を受けていたと。

石堂

そうですね。

だから、先ほどのように労働法が橋詰洋三君で、僕が刑事法をやっていたのですが、民法はだれがやっていたのかなあ。

呉

佐保先生。

石堂

あつ、佐保先生がやっていたんだ。

呉

それから、公法が松本先生。

石堂

ああ、そうか。法学部だから、教授連中四人でやっていたんですね。

司会(佐道)

これはいつまで続いたのですか。

呉

これは九九年です。八二年から始まって、九九年まで。

石堂

一一年前まで続けてやっていたわけですか。

呉

そうです。

司会(佐道)

これは、もう大体役割を一通り終えたということですか。

石堂

各大学に法律相談所ができたし、弁護士会などの法律相談で、ものすごく密度の高いものがどんどんできましたからね。だから、やってももう、需要と供給の関係で意味がないんじゃないかなあと。だから、相談そのものもだんだん少なくなってきたんですね。

司会（佐道）

八〇年にできて、市民講座、それから語学の講座、法律相談等々、開かれた研究所として活動を行ってこられたということですけども、一番中心になる研究活動についてうかがいたいのですが、社研といえは台湾史研究というのが出てくるのですけれども、そこにいく前に、社研の研究活動は部会を作ってやるというのが研究プロジェクトというのがありますよね。そういうスタイルといいますか、これはどういうところまで出てこられたのかということをちょっとお聞きしたいのですが。

石堂

はじめはそんな手元にたくさん作っているというものじゃなかったですね。正直言って、台湾研究なんかにしても、すぐ総合社研のときに関口猛夫先生がものすごく反対されました。「資料の整理をそんなに目をかけてやって、何の意味があるんだ」と言われまして、それで僕らは抵抗しました。「スタツフがいて、原資料を収集すること自体にも意味があるんじゃないですか。それをやろうとしている若い芽を摘まないようにしてもらいたい」と言いました。

それで、結局、認めてもらって、日本私学振興財団から研究費をもらって現地へ行けるようになったんです。

司会（佐道）

その台湾史研究ですけども、今は台湾史研究センターとなっておりますが、組織的な調査というのは八二年からと

いづぶつに記録ではなっています。その準備とかいろいろあつたと思いますが、そのへんは檜山先生、いかがですか。

檜山

一年前に行かされたんですよ、国会図書館へ調べに行けつて。日本に本当はないのか、あるんじゃないかと。仕方がないから、行かないと納得してくれなかつたですからね。

司会(佐道)

そもそも論で、中京大学の社研といえば、台湾総督府の資料調査をやっているということで、今はもう広く知られているわけですけれども、そもそもなぜそういうことが始まつたのかということは、外部の人間とか新しく来たメンバーからすると知らない人も多いと思うので、ぜひそこを教えていただきたいと思います。

石堂

それはやはり檜山ですよ。檜山が関心を持って始めようということ。

檜山

あれは違つて、石堂さん。

これは「寿司光」でね、これは公式記録じゃないよ。寿司光で飲んでいたんです。寿司光つて某所にあつたのですが、そこで飲んでいたんですよ。

そして、石堂さんが「研究所らしい資料みたいなものはないか」と言つので、そのときの文書がたまたま手に入りそつたからその話をしたら、それはいいじゃないかということ。最初に石堂さんが言わなかつたら、私はやらなかつたですよ。

司会（佐道）

飲み屋の雑談に聞こえるんですけども。

檜山

でも、物事のきっかけってそんなものかなあと思うんだけど、最初からじっくりやっていったの。それから後が大変でした。

呉

当時は、正直言って、こういう研究問題というのはあまり関心がなかったんですね。ところが、それを知っている方がいらっしやるんです。石堂先生が大学院のときに資料整理をして、賞をもらったとかもあってないとかいう話があったでしょう。それで評価したんですよ。こういうものをやっても実は価値があるということ、それで協力・推進したといういきさつがあります。もし石堂先生がそのときに評価しなければ、おそらくこういうことはなかったと思います。

檜山

だから、それがなかったらやってない。

石堂

始まってなかったかもしれないね。始まってないと思う。あれだけ強力な満鉄の調査部にいた関口先生が、総合社研の所長だったわけですね。その先生に、「こんな資料なんか集めてどうするんだ」と真っ向から言われましたからね。

檜山

強行に反対したからね。

石堂

本当に強行に反対だったからね。こういう研究所にスタッフが集まっているところで、頭から言われましたからね。それで、僕は、「先生、せっかく若いスタッフが原資料を集めて研究しようという意欲を持っているのだから、それを考えてあげたほうがいいんじゃないですか」と言いました。

僕は基本的に、みんなが気持ちよく研究できる場を作ればいいという認識ですからね、社研の委員長とか所長をやっているころは。とりわけ、檜山が就職のときからもう関係があったものだから、彼がそういう関心を持っているのに、それを言っただってどうしようもないやというのではつまらないから、とにかくやるう、やるうと言って。だから、最初は僕なんか、全然どんな資料かも分からないまま一緒に、三〇人ぐらいで行ったのかな。

檜山

四年目に石堂さんが行ったんです。だから、最初は私、一人だったでしょう。

石堂

ああ、そうだったね。

檜山

二年目が堀哲さんと二人で行って、三年目に前川さんと三人で行ったわけです。

石堂

そうそう。

檜山

そして、四年目で日本私学振興財団からお金がもらえたからみんなで行けるようになったんですね。

石堂

そうそう。

司会（佐道）

八五年の四月に「日本私学振興財団補助金交付」となってますね、九四年まで。

石堂

そうそう。

檜山

これは四年目なんです。

石堂

それがもらえたものだから、みんな勇んで行ったわけですよ。

檜山

あれがもらえなかったら今みたいにやってないんじゃないですか。

石堂

そうなんですな。

檜山

最初是一回行って、資料を取って帰ってくればいいやと一発しか考えてなかったんですよ。こんな三〇年近くも延々とやるようなものだと思うてもいなかったから。

石堂

ただ、これは裏話だけれど、台湾へ行って大丈夫かなあと思っていたものだから。大浜徹也も、大浜徹也も。僕が学部長だったときに彼がセンター試験をやっていたから、彼に連絡を取って、そのときは筑波大学に行ってもらったんだけどね。大浜徹也に、「こういう原資料を集めようと檜山が言ってるんだけど、どうだろうか」と言ったら、大浜徹也が「実は石堂さん、すごく貴重な原資料だよ。これが集まればすごいですよ」と言ったから僕は余計に勇気が出て、「それじゃあ、やろう、行こう」と言って行っただんですね。研究の発端というのは本当に面白いですね。

檜山

そうそう、それがなかったらやれていない。

司会 (佐道)

台湾史をやるメンバーというのは、最初はどのぐらいいらっしたのですか。

檜山

だれもいません。酒井さんを引きずり込んだんです。

酒井

あのね、私がこつちへ来た年かな。呉先生に、「社研というのがあるから行こう」と言われたんです。でも、「社研でしょ。私は文系だから」と。

そして、「何ですか」と言ったら、「実は台湾総督府文書を収集に行くんだ」と言つので、絶対見られると思っ
ないから、「えっ」と言っつてびっくりしました。

それで、ここへ来て、檜山先生がそのときに、「今度から新しい計画でやりたい。目録を三年で作る」と言ったのです。これはすごいと思って、乗せられちゃって、そうしたら。

司会（佐道）

それは檜山先生にだまされたんでしょう。

檜山

おれだって、三年でできると思ってたんだもん。

酒井

あのとき、三年でできるって言った。そんなすごいことはないと思いました。

檜山

それはね、いろいろなハプニングがあるから。

酒井

でも、軽い乗りじゃないと手を付けられない。

檜山

だって、いきなり約束を守ってくれないんだもん。見せるって言ったのに、見せなかったからね。

司会（佐道）

台湾側がということですか。

檜山

そう、台湾側がこころ変わるから。

司会(佐道)

九二年に「台湾省文献委員会と学術協定」となってますけれど、これは、つまり、向こうの公的機関とのやり取りがその前からあって、学術協定までやっていったということですか。

呉

あれは、九〇年の六月に、簡栄聡主任委員が文献委員会の人を引き連れてきたでしょう。

檜山

あっ、うちへね。

呉

そうそう、うちへ連れてきた。

檜山

大訪問団が来たんですよ。

呉

そして、簡主任委員と僕が二人で歩いているときに、これを共同編さんしたらどうかと僕が提案したんですよ。そうしたら、びっくりしてこれを持ってきたんですよ。その後、台湾へ会議に行っただよね。

檜山

そう、仕掛け人は呉さんだね。

呉

二人で行って、それとプラス沖縄の。

檜山

久部良さん。

呉

久部良じゃないよ。

檜山

赤嶺か。

呉

うん、赤嶺守。三人で台湾へ乗り込んでいった。

そのとき我々がこういうところへ座っていて、文献委員会がわーっとやっているの、大事な協定だからね。伸るか反るかでかなりやっただよね。そして、話がまとまった。だから、あれは本当に面白いきっかけでしたよ。

檜山

それには二つ条件があつて、呉さんが主任委員とうまい具合に話げできた。それと、石堂さんが蘇俊雄大法官とつながっていたのと、もう一つは邱創煥ともつながっていて、さらに林金瑩とつながっていたんです。それがなかったらできてない。

石堂

本当にそうですよね。

檜山

だから、正面から行って、ドアをたたいてやれるような話じゃなかったよね。

石堂

そつだね。戒厳令下ですから。

呉

当時はね、戒厳令で見せないんですよ。こんなものは秘密だと言って見せなかった。見せると捕まっちゃうとい
うおそれがあるので見せなかった。

石堂

台湾省政府の Director (蘇俊雄) という先生が無住所大臣でいたんだけど、それが偶然ドイツへ僕が留学した
ときのお友達で、ずつと付き合っていたんですね。

それから、林金莖さんは大使でしたね。

檜山

最初は副代表で、後に代表になつたんですね。

石堂

林金莖さんは早稲田の大学院に留学していて、ちょうどそのころ、僕がアシスタントをやっていた。それで仲が
よかつたんです、個人的な付き合いがあつたんですね。その関係で、邱創煥さんともつながっていたということ
です。邱創煥というのは省政府のボスですからね。そういう人脈が突然一つになつてね。

呉

林金莖さんというのは留学生だったんだよね。留学生といつても、役人だったんだよね。

石堂

そう、台湾の一等書記官。

呉

台湾大使館のね。それで、外交マークの付いた車に乗って早稲田大学大学院へ登校していたの。

檜山

まだあのころはあれでしょう。中華民國が放逐される前だよ。

呉

前です。

司会（佐道）

七二年九月まではそうですからね。

檜山

大学院に来ていた時期だから。

石堂

中華民國大使館の一等書記官でしたよ、林金莖は。

でも、大学院へ来たら一年生だから、「あっ、林が来た」とかって言っていたんですよ。非常に失礼ですよ。

司会（佐道）

でも、すごいですね。確かにつかがっていると、戒嚴令下ですし、今の台湾と同じように考えたら絶対いけませんね。

石堂

ああ、全然違う。それはもう大変でした。

呉

あのとき、我々も何でも言える時代じゃなかったから、だから林がやってきて、台湾の留学生の間でしゃべるともちょっと抑え気味で、どこにスパイがいるか分からなかったから。

大陸の学生なんてとんでもない。しゃべったらすぐ報告されて、「おまえはスパイだ」とやられちゃう可能性があった。

司会(佐道)

例えばここで、台湾のことを一生懸命研究すると言って、大陸のほうは何が言ってくるのかそういうことはなかったですか。

檜山

台湾は何も言ってこない。圧力もないし、何にもない。

石堂

何にも言わなかったです。

台湾の中で戒厳令が敷かれているものだから、全然見せてもらえない。その扉を開くのが大変だったというわけですね。

司会(佐道)

そついうまさに個人的なつながりとかいろいろ偶然もありながら、それが台湾研究が発展してきた最初になるわけですね。

だって、置くところがないんだから。たまたまそのときに中日新聞が何かに載せるのに、便所の前にダンボールが積んであって、そこで写真を撮ったんだよね。それで、事務局長にしたらまずいなあとということで、部屋を一つくれたわけだ。それが今の三階なんです。

酒井

廊下にずっと並べてね。

檜山

三階に部屋をくれて、あそこにグリーンの書架があるけれど、あの書架を入れてくれたんです。それでやっと整理ができた。

それまでは広げようがないから、会議室を結構使ってたね。目録を作れと言われたから、あそこで広げながらやってたでしょう。そのときの会議室というのは、中小研とうちが共同で使っていたので、あそこも絶えず広げっぱなしというわけにはいかなかった。広げてはったり、しまったりしていたわけですよ。

司会(佐道)

今みたいに、個別の部屋があつてというわけじゃなかったということですか。

檜山

そうです。

酒井

とにかく、取ってくる資料がすごく膨大なので、周辺の資料も全部コピーを取ったりするので、量が多いんです。

呉

だから、スタートしたときの話なんていうのは、本当に聞くも涙、語るも涙みたいな感じでね。だって、向こうへ行ったら、本当にかび臭くて汚い部屋でね。

檜山

本当にひどかったもんね。

呉

僕ら上着を脱いで、扇風機も古めかしくて汚いのが一台しかないでしょう。

石堂

最初は地下室の汚いところで。

呉

上のほうは冷房が入ってるんだけど、地下室は冷房が入ってないんだよ。我々はそこで仕事をしていたんです。

檜山

そういえば冷房がなかったね、あそこは。

石堂

しかも、全然コピーを取らせてもらえなかった。全部手書きで。

司会（佐道）

筆写ですか。

檜山

そのノートはしっかりあるけれど。

呉

それも実は簡さんのおかげなんだよ。

ある日、招待されて、食堂へ行ってご飯を食べていたの。そして、食べ終わって部屋へ帰ろうと思ったら、簡さんが「こんな原始的なやり方はない」と言うので、「これが将来はれたらお笑いぐさになるんだよ。とにかくコピ―をさせてくれ」と言ったら、「考えるわ」と言ってね、それでOKが出たんですよ、実は。そして、手写しからコピ―になったんです。

檜山

そうそう。

呉

本当に一日中書いても、進むはずがないんですよ。人海戦術でやっても全然進まない。

司会(佐道)

それはそうですね。

檜山

それも、「目次を写せ」と言われたんです。最初は中身だったんだけど、ある時から「目次を写せ」という話になって。

呉

だから、僕はそういう意味でね、簡さんというのはこれを許してくれて、そして、共同編纂でいきましょうと言ってくれた。それが本当に大きな飛躍だったんです。

彼も決断するのは大変だったと思うよ。

檜山

そうだよな。

彼は野心的だったからね。

呉

そうそう。

司会（佐道）

ちょっと細かい話ですけど、檜山先生をはじめとして、台湾史の専門の方がいらっしやらないと。つまり、台湾のことをやっておられる方がいらっしやらなかったということ、向こうでのコミュニケーションはどうしていたのですか。向こうの方が日本語をしゃべれたから、世代的にそうだったからうまくいったということですか。

檜山

そうです。

それからもう一つは、文献委員会自体が台湾人で、日本時代の人たちを集めていたことです。

呉

あそこは、結構日本語が通じるところだったな。

石堂

副主任委員のだけだった。

呉

劉寧顔さん。

石堂

あの人もいい人だったね。

檜山

いや、みんなそうですよ。

それで、もともと文献委員会という組織そのものが二二八事件以降の話でね、ある意味ではけ口にさせるんですよ。そして、国交断絶のときから反日の資料集を出すんです。そのために、日本語ができる人間をあそこに集めたんですよ。そういう関係があったからみんな日本語ができるんです。

そして、台湾派でしょう。そういう人が集まっているので、何にも問題がなかったというのが逆に失敗だったわけだ。

司会(佐道)

そういう大変厳しい調査を経て今日につながっているということですね。

石堂

そうですね。

司会(佐道)

さっきちょっとかがったんですけど、社研の研究としては、部会と研究プロジェクトが二本立てになっています。部会というのが大きい組織ですけど、こういう活動でやり始めたのは、例えば九八年の記録ですと、ここにある部会は台湾研究部会、イギリス研究部会、オーストラリア研究部会、ロシア研究部会ということになってま

すが、これはもちろん今も引き継がれている部会が大部分になっていくんですけど、こういうことについて部会を立ち上げて研究をしようというのは、これはいつぐらいからなのですか。ときによってだんだんできてきたという形だろうと思いますけれど、最初の部会というのは。

呉

最初の部会は、石堂先生が所長だったときなんですよ。

石堂

アメリカで最初はやりましたね。それからイギリスへ行った。イギリスは、実際に実態調査へ行きましたね。

檜山

何回かは行っているはずですよ。

司会（佐道）

石堂先生が所長になられたときに部会が立ち上がったと。

石堂

はい、そうです。

司会（佐道）

先生がなられたのは八八年ですね。

石堂

はい、それぐらいです。

呉

プロジェクトは、一九九六年に僕が所長になって、そのときに、部会だけでやっていくと将来問題が出るんじゃないかなあという気がしたんですよ。それがどこかに書いてあるんだよね。

安村

あれは呉先生が所長のころです。三年ぐらいでコンパクトにやって成果を出して、また次のをやるつという二本立てだったんです。

呉

それで、一冊でも二冊でも三冊でも出した後で、あとはもういやというときには自由に解散できて、常に新しいプロジェクトを組織してやったらどうかと。そのときの運営委員長が安村先生で、相談しながら提案していった。提案して通ったんです。

司会(佐道)

もっと機動性のある。

呉

機動性があつて、省エネで、金もかからなくて。これまで、どっちかというと包摂されていない方々がいらっしやるんですよ。なぜかというと、部会の活動というのは、地域研究の中で部会を作ったわけだから。地域研究の中に入っていない人は少人数なんだけど、プロジェクトを作っていけば何かやれるだろうと、そういう意図で立ち上げたわけです。

それが所員会議で認められて、結局はどういうプロジェクトがあるかということ募集したんです。公募したんですよ。その中から主任会議で決めて三つ選んだのが、消費者問題だとかいろいろ、どこかに記録が残ってますけ

れど、三つのプロジェクトが立ち上がったということです。

安村

九六年です。

司会（佐道）

部会というのは基本的に地域研究なんですね。

呉

だから、アメリカとかロシアとか、こういう文字が付いているんです。

安村

それで、プロジェクトはテーマ性が強いということですね。

呉

そうそう。

檜山

あれはなぜ地域研究にしたの。あれはイギリス部会です。

違う。アメリカ研究から始まったから地域研究なんですね。

石堂

そうそう。

それで、イギリス研究部会の実態調査で、イギリスへ二回か三回行きました。

檜山

あれは何回か行ったでしょう。

石堂

行きました、研究費をもらってね。

安村

オーストラリア部会というのは、あれはそれこそ台湾と同じようにだれも専門家がないわけですよ。でも、たまたまあつちの先生がやるうということになって。

呉

デイヴィッド・マイヤーズでしょう。石堂先生の紹介で。

檜山

それが発展して、法学部で日華法律家会議、国際、環太平洋か何かやったよね。

司会(佐道)

環太平洋の法律家会議をやりましたね。

檜山

だから、発展してあるものが一つ作れるよね。

石堂

そうですね。

安村

オーストラリアからカナダについて、今は合体して英連邦になっている。

司会（佐道）

英連邦研究会ですよ。

呉

そのとき、なぜそういうことを提案したのかというと、一つは人間の問題があるんです。それぞれの構成員がすべて社会科学じゃないということで、人文科学や自然科学の方もいらっしやるし、数学の先生までいらっしやるんですよ。だから、とにかく少人数の人をどうやって組織と関連付けるのかということです。

もう一つは、さっきも言ったように、財政的に非常に困っているときだったんです。なぜかというと、大学の予算がゼロシーリングのときだったんですよ。だから、絶対に増えないということが分かっていました。

それから、よその大学だと一つの部会で研究所を作っているわけですが、うちは部会が研究所みたいになっていくわけですね。そうすると、そういうことがやれるのかなあと、個人的にはそういう疑問があったんです。だから、プロジェクトで本当に短期決戦でやったら、あとは解散して、また新しい構想があれば新しいプロジェクトを作ってやったらどうかということですよ。

石堂

けれども、イギリス研究会が実態調査に行ったり、研究活動をやって雑誌にまとめたりしたおかげで、EC研究の大家、D・ラソク（Dominik Lasok Q.C. (1921-2000)）先生を中京大学に客員教授としてお迎えして、社会科学

QC = Queen's Counsel (勅選弁護士)

D・ラソク先生は、当時、イギリスのエクセター大学教授、現名誉教授。

学研究所で共同研究をやったりしましたからね。ああいうことも一つの成果ですね。研究成果が、ちゃんと何号かに載っているでしょう。

呉

載ってます。

それから、リーダーがいなくなると部会がどうなるかという心配もある。例えばね、檜山さんが今度定年退職なさった後、台湾部会はどうなるかというのと、これは大変なことになっちゃいます。

檜山

部会はそういうことがあるね。

安村

それで今、困っているのが英連邦部会ね、吉川仁さんが亡くなったから。

石堂

そうですね。

司会(佐道)

そうですね。実際の問題として、本当にそうですね。

檜山

取りまとめるって大変なことだね。

呉

だから、アメリカ研究と言ったって、それだったらアメリカ研究所でしょう。台湾研究所とかね、こうなってく

るわけですよ。ささやかな予算しかもらえないのに、こんなに大きいことをやろうと思っているのは、将来のことを考えるとちょっと心配だなあという気がしたんですね。

石堂

そうですね、何となく僕は思うのだけれども、偶然かもしらんけれど、わりあいユニークな地域研究ができていますよね。台湾の研究なんかも典型的にそうだけれども、オーストラリアの研究もそんなに日本中どこでもやっているわけでもない。ロシアについても、ロシアにももう少しやっているとこがあるから、ものすごく限定して「シベリア」にしているとか。

呉

だから、この構想は別に部会を廃止することではないんですよ。部会を部会でやって、別にこういふことをこじんまりとやるものもあつたほうがいいんじゃないか。

司会（佐道）

双方を補うものとして。

石堂

そうそう「補う」ものとしてね。

檜山

だから、できるだけ全部の所員が入れるようなものがあるといいんだよね。なかなか理想どおりにいけないけれども。

司会（佐道）

そこで、所員と準所員というポジションがありますね。専任ではないけれども、準所員として研究メンバーに加わってもらおうというような、これは研究所ができたときからですか。

石堂

できたときから。これは僕の頭の中に、東大の社研がありまして、東大の社研もやはり準所員と所員というか、専任でも非常勤でも社研にどんどん来て、研究会に参加しています。しかも熱心な方が多かつたものだから。

司会(佐道)

そうですね。準所員という方々に参加してもらわないと、研究プロジェクト自体にしても、部会にしても、なかなか活動が広がらないということがあると思いますから、大事な役割を果たしているわけですから。

檜山

それと、次いでだからちよつと石堂さんに聞きたいことがあるんだけど。規定の中に「主任研究員」という条項があるんですよ。あれはだれがなって、いつたいなぜあの条項があるのか。結局、規程変えるときにすくつくったことがあつたんだね、なんなのがよく分からないですよ。

呉

有名無実ですよ。

石堂

研究をやるときに中心になってやる人を主任研究員と。だから、部会長みたいなものです。

二〇一〇年四月一日より所員は研究員に、準所員は特任研究員に改められた。

檜山

あつ、そういう意味であの条項があつたわけ。

石堂

部長長に相当するものですね。

檜山

すごく困って、意味がよく分からなくて。

司会（佐道）

研究所だけに所属する常設の研究者がいるわけじゃないので。

石堂

そつ。

檜山

その当時は所員・準所員という中で、「主任研究員」というものがあつて、それが意味がよく分からなかったわけですね。

石堂

主任研究員というのは、教育研究を中心になってやる人のことを主任研究員というふうに位置付けようというものでですね。

司会（佐道）

社会科学研究所ができるまでの経緯いきほひですとか、そういうことをおうかがいして、大きな流れといいますか、今に

つながる部会があり、プロジェクトがあり、また、台湾研究の始まりとか、今に至る大きな流れはだいたいわかりました。

これまでもう三〇年になるわけですね。総合社研を入れたら四〇年以上という話になります。これまでの活動の中で、どうしても忘れられないといいますか、特筆すべきエピソードですか、こつということがこれまでの活動の中であつたんだというものを、我々、新しく入ってきたメンバーも知っておいたほうがいいような、そういう話を、たくさんあつて、どれかというのものなかなか難しいかもしれませんが、思いつくままで結構なんですが、教えていただけたらいいなと思います。

石堂

僕が一番感動したのは、異文化の接触の問題です。

司会 (佐道)

異文化の接触の問題ですか。

石堂

これは台湾に行っても、それからイギリスに行っても、全く新しい自分では分からない世界の人々と接して、文化の違いを肌で感じたのです。それは新鮮な感じでしたね。

だから僕は、そういう新鮮な感じを若い先生方ももってどんどん地域研究をすすめていくのがいいのではないかなと思つんです。

だから若い先生方が共同研究をやりやすいような場づくりを徹底してやらなきゃいけないんだという、僕はそういう気持ちですつといました。

司会（佐道）

呉先生、大まかな流れをうかがってきتانですけれども、これまで社研だけでも三〇年、総合社研を入れたら四〇年以上という歴史になるわけですから、忘れないようなエピソードですとか、こういうことがこれまでであったということございましたら、ぜひ教えてください。

呉

忘却のほうがり固まって、ほとんど覚えていませんけどもね。私は石堂先生が所長になっている時期に委員長を七年間やりました。在任期間が長かったのですが、ただ一つ言えることは、社研は年に一〇回の研究会というは絶対にやるということです。本当に回数が多かったですね。

ある時イギリス人の先生が研究発表の日になって現れずに、イギリスに帰っちゃった。イギリスに帰ったというわけだね、えらいことになったというわけだ。

それでいきなり「じゃあ、やりましょう」ということになり、その場でよ。みんな集まっている間もない。「じゃあ、やりましょうか」と。

安村

ピンチヒッター、ピンチヒッターですか。

石堂

だれがやったの、あんたがやったの。（爆笑）

安村

だいたい、運営委員長が司会をせなあかんでしょう。候補者も手配せないかんでしょう。で、その人がいなくなっ

たら、だれがするのっていったら、大概決まってくるでしょう

呉

だれもたすけてはくれない。

石堂

そうか。

呉

そりゃあ、しんどかった。そういうのが二回ぐらいありましたよね。

司会(佐道)

確かに研究会の回数が多いということは。

呉

本当に多い。だって総合社研のときに二二〇回やっているわけですよ。

石堂

そう、二二〇回やりましたね。

呉

すごいですよ。自主団体でもって一〇年のうちに二二〇回やっているわけですよ。二二〇回ということは、本当にすごいことです。そのときから三月と八月以外は必ず一か月一回やるということなんです。

檜山

だから年間一〇回はきちんとやっているわけですね。

呉

きちんとやっている。そのあとまきちんとやっている。

司会（佐道）

それは、この中京大学を研究をする大学というふうに変えていきたいという強い思いが、あったわけです。

呉

社研の運営委員長をやっているときは堅苦しいことばかりじゃなくて、たまには柔らかいこともあって、名城大学の本城武雄先生ね。

檜山

佐道先生なんかのすごい師匠らしいのです。そこでお願いして、「先生、講演をやってください」と。

呉

お願いして、研究発表をやっていただいたことがあって、そういうことがありましたね。

司会（佐道）

いろいろ市民講座とかだけじゃなくて、公開研究会ですとか、それから定例の学術講演会じゃなくて「日華経済交流シンポジウム」とか、こういうイベントもなさっていたわけですか。

呉

華々しかったですよね、あれは本当に。

石堂

それは地域研究でボンと行ったときに接触してコンタクトできるじゃないですか。そういう人で著名な方がいる

とする。連絡取って来てもらう。

呉

だから実行委員会というのは外国人が多かったですね。

石堂

マルコム・スミスなんかも東大の研究員でやってきて、中央大学の法科大学院の教授になった、彼、亡くなつたね、若いのに。

司会(佐道)

だれがですか。

呉

マルコム・スミス。

司会(佐道)

本当、へー。

安村

僕が講演会のことで思い出すエピソードは、やっぱり公開講演会という形を取っていましたから、市民の方も来てもらえるような方をお招きしようということを考えて、ある時にノーベル賞をもらった白川英樹先生にお願いして来ていただきました。

石堂

よく来てくださったね。

檜山

彼は一本釣りの名手なんですよ。

安村

その次の年は東京大学総長を辞めたばかりの蓮見重彦という先生に来てもらったし、それから次に檜山さんが饗庭孝典さんというNHKの解説委員をされていた人とか、それからもう少し下って二五周年の時は佐道先生もご存じの三人ディスカッションじゃありませんか。江畑謙介さんとか、ああいう人に来てもらったり、そういうふうに少し世間にも知られているような方をお呼びして、市民の方に聞いてもらえるようなことができたというのがひとつのエピソードですね。

石堂

だから、あれは法人のほうもびつくりしちゃってね、「わずか二二万円」だとかね。よそのほうも、外国人を呼んできたら、何百万取られるだろうねという話をしているわけでしょう。まさか、中京大学は二二万円ですと云ったらだれも来なくなりですよ。

司会（佐道）

ほんとですよね。

安村

そんなのだれも予想もしていないので、いっぺんやってみようかという感じですよ。

檜山

本当にですよね。

安村

満員になりましたよ。そういうことも一つのエピソードです。

ノーベル賞を受賞した年は忙しいに決まっているから、ちょっとほとぼり冷めた次の年ぐらいから。そして、もう一回来ておられます、白川先生は。

今度は、大学全体でやった、元ノーベル賞をもらった人ばかりを集めたシンポジウムみたいな。

司会(佐道)

そっちはきつと高かったんでしょね。

安村

そっちのほうは僕が司会をしました。

石堂

江崎玲於奈さんも来たりしていたね。

安村

田中耕一さんとかも来てくれたりと、そういうこともひとつですね。

司会(佐道)

確かに社研でやっている学術講演会というのは毎年定例ですけれども、目玉になっていると思いますね。これも社研ができてからずっとやっておられることで、なかなかどういう方に来ていただいているというのを、私も今その企画とかに参加させていただいているので分かりますけれども、難しいですよ。

本当に研究活動ということと同時に、社会に還元するというんじゃないですけども、講座や講演会を開いてな

るべく一般の方々にも接してもらおうという姿勢が、前からずっとあるのかなと思うんですけども。

石堂

大学の社会的解放というやつですね、そういう理念はありましたね。

司会（佐道）

メンバー構成的にはどうなんでしょう。最初のころ、今は法学部の先生、それから総合政策学部（旧商学部）からも数名入ってくるし、それから国際教養学部（旧教養部）ですけれど、そういう先生が、もちろん現代社会学部の大友昌子先生とか。やはり学部構成的にはそういう感じでしょうか。

呉

やっぱり教養部の先生が多かったです。絶対数が多いからね。

司会（佐道）

そうですね。

安村

ここに定例研究会「二〇〇回を振り返って」、どんな研究テーマでなされたかというデータがあるんですけども。そこからも一つ分かるのは、やっぱり一番多いのは法律関係四〇本、二〇五本やったうちの四〇本が法律関係です。

石堂

人数は多くないけれども頑張ったわけですね。発表は法学部の先生が多かった。

呉

それはどうしてかというと準研究員の方も多かった。「法研究会」というのがありましたよね。

安村

本来の社会科学研究所というイメージからすると、そういう意味で経済の先生方が割合が少ないというのが一つですね。

呉

それは簡単なんですよ。「中小企業研究所」ができて、「経済研究所」ができて、スポツと抜けてしまった。

安村

そついうこともあつて地域研究のほうでもつ少し幅を広げるといふ、そついう特徴があつたような気がしますね。

檜山

経済系は少ないんだね。

司会(佐道)

本当に少ないです。

檜山

本来は社会科学研究所といつたら経済も相当入つてこないとだめだよな。

安村

紀要の論文の原稿でいつたら圧倒的に法律関係が多いですよ。

酒井

社会学部の先生も少ないですよな。

石堂

もともと、絶対数が少ないですからね、社会学部の先生は。

安村

ちよつと校地が離れているのもありますがね。

司会（佐道）

しょうがないところありますね、地理的なこととか人数的に少ないとか。ただ経済の方が少ないのは残念ですけども、経済学部の「経済研究所」があつて、その中で活動してられる人が多いものですから、仕方がないとはいえ仕方がないです。

安村

そのぶん体育からも何人が来ておられましたからね。

司会（佐道）

体育ですか。

安村

体育でも。

檜山

体育学部はいたんだけど、今いないかなあ。

安村

藤原健固先生って。

石堂

藤原先生。

呉

頑張ってたけれども、病気になって。

司会(佐道)

今もいらっしやるんですか。

安村

体育はもうおられないでしょうね。あれも「体育研究所」というものができていますからね。

石堂

そうですね。

守能信次さんという方がいらっしやいましたけど、有能な方でしたね。

酒井

ああ、そうですね。

安村

守能先生ですね。

呉

だから社会科学研究所というのは異色なんですよ、そういう意味で。専門の人が入ってきてもちやんと研究会に列席して、言いたいことを言って、帰っていけるといっような、いつも「アットホーム、アットホーム」という言

葉をお使いなんですが、そういう雰囲気の下で運営されているんですよ。

司会（佐道）

大体お話をつかがってきましたが、あと漏れているところとか。

呉

将来像。

司会（佐道）

最後にそれをつかがおうと思うんですけど、今お話しがありましたように、ぜひ今後の社会科学研究所に期待するものとか、将来像についてご意見をつかがっておこうと思うのです、石堂先生。

石堂

僕は若い人を育ててもらいたいですね。やっぱり若い人は研究したくても、なかなかその研究の場がうまく作れない。何をどうやっていいか分からないと思いますから、できるだけ若い人をうまくのせないで。研究の場づくり、それをこつという社会科学研究所なんかとりわけ気持ちを持たなきゃいけないんじゃないかな。

そして、専門を横断的に、学際的な研究というのは、こついうところでないといけないでしょう。それを今後目指していったら、特徴が出てくるのではないのでしょうか。

司会（佐道）

私などもここに入らせていただいて、ほかの学部の先生と協同研究のチームを作ってやらせていただいて、大変勉強になりますし、ありがたいですよ。学部のいろいろな専門の先生と交流していただくことは、

石堂

僕のささやかな経験ですけれども、研究会に毎月休まないように出ました。そして、いろいろな分野のいろいろな人の話を聞く。それを吸収しているのか、自分で論文を書くときにいろいろな視点がぼろっと出てくるんですね。学際的な研究を、とりわけ目標にして何かやるうとしたって、そう簡単にできるものじゃないですよ。しかし、日ごろ、分野の違う人の話を真剣に聞いていると、何か自分が書いたりしゃべったりするときにふっと出てくる、それが非常に貴重なんじゃないかなという、そういうささやかな経験を持っています。そういう意味で僕は、これからは社会科学研究所のようなところでないといけないような学際的な研究をどんどんすすめていったらいいかなと思います。

例えば檜山君。彼が来たときは本当に若い。ただ頭ごなしに関口先生からぼんと言われてそれで終わっちゃった。やる気をなくしてしまうでしょう。そういう若い人と一緒にやりましようというふうな場づくりを大事にしてもらいたいと思いますね。そうしないと、研究所の将来はないんじゃないかなと強く感じますね。

呉

全く同感なんですよ。実は、きょう来る前に叢書を作ったときの名簿を探し出して持ってきたんですけれどもね。

プロジェクト研究と部会の研究、両方が発展しているものですから、狭間にある社研が主催する研究会が細ってきたような感じがするんですよ。これを非常に気にしているんですよ。

そもそも私みたいに法律を全然知らない者が論文を書いたり、本を出したりしているのですが、その中には法学的な視点をたくさん取り入れているんですよ。それは先ほどの安村先生がおっしゃったように、たくさん研究発表を聞かざるを得ないという立場にあつて、たくさん聞いているわけです。そこから大いに影響を受けました。個

人的には成果だったというふうに考えています。

でも考えてみると、実は「消費者問題」と「消費者被害研究」というのは二年七か月の間に研究会を二九回やっただんですよ。発表者が二八名いまして、一回少なくとも二時間、多いときで二時間半と。それが終わるとはじめてから予約しているから「浜木綿」で、まだやっているわけですよ。

そして短期決戦で二年間続けて、その結果、二冊の分厚い本を出したんだけど、ところが、案内というのは全員に出さないんだよね。プロジェクトに所属している人しか出さないんだよ。それは部会もまた同じことだよ。これが非常に問題だと思うんですよ。

こういう多くの研究会でやって、これだけ多くのテーマをやって、そしてその成果が全員の手に入らないというのは、研究会の持ち方をもつ一度反省する必要があるんじゃないかという気がするのです。

だから、深い意味でなくても、とにかく案内を必ず出して少し魅力的に入ってもらえるような、聞いてもらえるような、そういう研究会の持ち方はできないのかなという気がしましたね。

雑だと思うのです、僕にとっては、でも、それはブレイクチャンスなんだよね。堀先生の専門なんていうのは、まさに本当に。

石堂

民俗学。

呉

民俗学、文化人類学のことをやっているわけでしょう。自分は聞いていて面白いんですよ。だから、そういうチャンスをもっとたくさん作れたらいいなというような感じがしますよね。

酒井

今は昔と違って、みんなメールで案内を出しますので、なんとという手間もないです。

司会(佐道)

せっかくの機会ですからね。

呉

社研の良さはそこにあるんですよ。専門の人が固まってやるんじゃないくて、非専門の人も参加できる、そういうのができないのかなあという感じがするのです。

酒井

検討してみましょう。

呉

そう簡単じゃないと思うけども。

安村

僕もそう思いますけれども、僕は一応現役でいる……(爆笑)。最近の大学は、教員にとって忙しさが増してきているんですよ。どちらかと言えば、研究をメインにして、教育をするという時代から、だんだんこの比重が半々ぐらいになきゃいけないと。教育にもっと力を入れなきゃいかんという時代ですよ。

そつすると、授業の準備とかいろいろなることも含めて、本当はそれが当たり前なんでしょうけれども時間を取られるような状況になっていますし、それに伴っているような作業をなきゃいけないことが増えてきていますよね。

一方で研究しなきゃいけないという何か圧力があるという、そういう意味では忙しくなってきたらと思うんで

すよね。

そういう中で、この研究所が専任研究員がない、みんな兼任であるという中で、どうやってこれから研究活動を保っていくかというのはなかなか難しい問題があると思うんですよね。

だから、ある意味で、かつてのよいところは吸収しなければいけません、それがもしだんだんできなくなってくるのであれば、また何か新しい形のこと模索していかなければいけないような気はするんですよね。実際、なかなか研究会に集まらないのは、何となしの忙しさというものがあるかもしれません。

石堂

そんな忙しいですか。

司会（佐道）

それは忙しいですよね。

石堂

そうかねえ。

安村

それは、報告書を出さなきゃいけないとか、シラバスだってちゃんと提出しなければならないとか。

司会（佐道）

会議は多いし。

安村

それはやはり一〇年前と今と比べたら違うと思うんですよ。そういう状況にあるということですよ。

しかし、何か研究しなきゃいけない。それがここで研究できるというふうなものにつながってきて、実を結んでいくようにしないと。そこが一番難しいところですよ。

ところが、これからどうやっていくのかという話がチマチチと出たときには、ある意味で前よりもっと多彩になってきているような気がします。やはり日本がこれからどっちの方向を向いていくかという大きな流れからして、近隣の東アジア諸国、そこと何かターゲットを絞った研究をしようとかいう動きも出ていますから。そういう新しい視点も出てきているのでいいなと思っています。

石堂

研究所の予算というのは、どうなんです。

安村

研究所の予算は変わりませんよ。

檜山

ずうっと変わっていません。

安村

ありがたいと言えばありがたいことなんです。

檜山

毎年のように積み上がっているんだよ、5%とかですが。

安村

マイナスにはなっているけれども、ここの学校はマシなほうだと思いますよね。

図書館も含めて、そんなものいらないじゃないかと言われて、削られそうな状況にあるのです。

檜山

国立大学からみるとはるかにいいわな。

安村

そうですね。

司会（佐道）

一律一〇%カットという話ですから。

安村

それを思ったなら、本も出せるだけの予算があるんだから、恵まれているほうだと思いますよ。

呉

そう。

檜山

そういうところだよな。

司会（佐道）

さて、予定していた二時間が終わりました、そろそろ締めたいと思うんですが、檜山先生の若かりしころの話がうかがって、檜山先生に若いころがあったんだとあらためて思った次第です。

いろいろお話ができました。現所長として、最後のごあいさつを含めて、檜山先生にひと言いただいでから終わりにしたいと思います。

檜山

「あいさつなんかないけども、今、安村さんが言われたように研究所がいま抱えている問題はすごく大きいと思うんです。まずみんな忙しいだけじゃなくて研究をやらされているでしょう。その研究は科研費を含めて、外部資金を外から取ってきて、自分でやらなきゃいけない。今までのように集まってきて何かやるうという、そういう状態じゃなくて自分が一つの研究の核になってやらなければいけないというのは、世の中全体ですから。」

だから、学会ではそうだけれども、みんな来ないもんね、学会全体がそうでしょう。これはどうしようもないと思うんです。今の時代にあうような形に研究所は変えていかなきゃならないということで、佐道さんなんか中心になって、COEのような研究と教育を合わせたような何か違う形にしていかなきゃいけないだろうなということ。やりたいんだけど、なかなか当局との関係もあって、うまく具合にいかない。」

司会 (佐道)

研究に対する大学当局の理解が、まだ十全ではないということ。

檜山

ところが、台湾も含めてそうですが、例えば名城大学は台湾との関係を強化するとか、それぞれの大学が独自の研究所を作り出してきて、かなり進んでいる中で、我々は焦っているところです。まわりから比べると、取り残されてきているんじゃないかという危惧を持つんです。それは教育が非常に強く動いているせいなんだろうとは思いますが、気がついたときにはうちだけがこういう状態であるというだけのことだけは避けなきゃいけないと思う。そのへんがやはり研究所だけじゃなくて、学習主導の教育と研究の強化というのかな、何か必要だと。そういうのが我々が置かれている状況なので、やっぱり新しい時代をみなければいけないなど。」

きょうは石堂さんと呉さんの話を聞いていて、つくづく思ったのは一九六〇〜一九七〇年代の日本の社会の中であつて、総合社研ができて活発化があつたんだというのはよく分かるわけですよ、雰囲気として。

でも、二〇一〇年の今の状態は、どうもそういう状態じゃなくて、全体が沈んでいる社会経済が止まっている状態で、だからやはり我々も、みんなに夢を語るような何かをここで作りたいと思つんですけれども、なかなかうまく出てこないですね。それがこれからの課題かなというふうに思います。

司会（佐道）

長時間、どうもありがとうございました。

（終了）